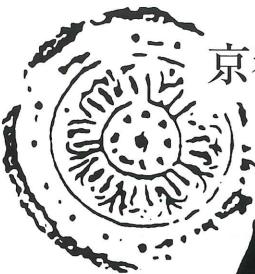


京都市文化観光資源保護財団



今報

91

NO.

2006.5.15

もくじ

寄稿

京都の社—神仏道三教の習合—
妙法院門跡門主 菅原 信海

特集

京都の近代を飾った名建築家たち—3
京都で活躍した
モダニズム建築家

京都工芸繊維大学大学院助手
笠原 一人

保護財団の活動

2

4

10



京都の社

—神仏道三教の習合をみる—

菅原 信海

多くの文化財が、凝縮して一地域に集まっている都市は、ここ京都と奈良において、他には見当たらない。それは、これらの二つの都市が、日本の政治・文化の中心としての長い歴史を持ち続けていたからにほかならない。

つまり、奈良にしろ京都にしろ、都として栄えていた頃は、中国や西域の文化を取り入れた国際文化都市の色彩が強かった。それは、いまの首都東京が、明治以来の西欧文化の摂取によって、西欧文化都市となっているのと、よく対比される。京都は、平安京として、1070余年の間、都であり続けたことは、それだけ多くの文化財を抱えていることになる。その文化財は、中国や西域の色彩の強いものが多いということは、いうまでもないが、今に残されている文化財の中で、外来の特に仏教や道教といった宗教の影響は、多くの寺社に見ることができる。

先ず、その一つの例として、吉田神社の末社である斎場所大元宮をとり上げてみたい。この大元宮は、室町時代、唯一神道つまり吉田神道の創唱者吉田兼俱かねともが、文明16年（1484）に再興したもので、吉田神道の根元殿堂である。吉田神道は、教説の中に密教や道教をとり入れていたので、明治維新の神仏分離政策によって廃止され、吉田神社は国学神道（復古神道）の流れに統合されてしまった。平安末に地位を固めてきたト部氏の流れを汲んでいるのが吉田家で

あって、吉田家は全国の神職を支配下において、神社界の中心的存在であった。兼俱は、文明8年（1476）自ら神祇長上を称している。兼俱以降の吉田家の当主は、代々神祇長上を名乗って、明治維新まで全国の神社と神職を支配し、神社界に絶大なる勢力をもっていた。

兼俱は、吉田神道の創唱者であり、文明初年頃には、その神道説がかなり整備されていたと思われるが、その頃建立されたのが、吉田山上にある斎場所大元宮である。斎場所建立のときは、ここは神武天皇創建にかかる全国諸社の根源であるとされた。そのような関係で、ここは崇拜の対象となっていたがために、観光の対象とはなっていないが、大元宮の建物は、八角形の社殿造りで、特異な形式の建物である。その周囲に、伊勢内外宮、八神殿、式内3000余社を配祀しているもので、まさに兼俱の描いた唯一神道説を具象化したものといえる。

大元宮という名称は、大元尊神つまり國常立神とも関連するが、「太玄」と表記すれば、それは虚無恬淡なる道を指し、老莊的な発想であることに気づくことであろう。すなわち大元宮は、その名からして道教的な名称なのであり、また八角形という建物の構造は、日本の神道で好まれる数字である。吉田神道で修する三壇行事の中の神道護摩の護摩壇は、八角形をしていることも、その証しの一つである。

吉田神道の教えを具現した大元宮の存在が、



吉田神社 斎場所大元宮

京都市を中心として、神道界に権威を振るった証拠として、いまも存在していることは、歴史的文化財として貴重なものといえよう。

吉田神道に関係したものとして、「神祇道靈符」がある。神社や寺院で配る祈祷札つまり符は、もともと道教で行われている符、例えば、「玄靈符」などがもとになっている。むしろ、この玄靈符を真似て、兼俱が作成したのが、神祇道靈符である。もとになった道教の玄靈符は、道藏の『太上玄靈北斗本命延生真經注』の卷五に収められているものであるが、別行し且つ兼俱風に改変して神祇道靈符を作っているのである。

この神祇道靈符は、天理図書館に収蔵されているが、京都でも身近に、その写本がみられるのである。それは、大將軍八神社に所蔵されているからである。この神社には、かつて配布したいいろいろなお札が残っていて、これらは知られざる文化財ともいわれるものではなかろうか。大將軍八神社は、北野天満宮の南の方角に当た

り、かつてその場所は、平安京内裏の北西の角で、陰陽道おんみょうどうという天門に当たる。つまり方位を守るに相応しい神社で、大將軍宮とか大將軍社といわれていたが、明治以降大將軍八神社となつた。方違え、普請などの建築造営の方位除けなど方位の神として信仰されている。

宝物殿である方徳殿には、大將軍神像80体を蔵し、また北極星や北斗七星を表す神像などがあるが、その中に吉田神道の神祇道靈符の写本が、展示されていて、興味を惹かれる。この大將軍八神社の方徳殿のように、道教や陰陽道の影響下にある、多くの古文書や写本類がみられるのは、これも隠れた文化財の宝庫である。

祇園社には、牛頭天王ごずてんのうが祭神として祀られている。この祭神牛頭天王とは、いかなる神なのであろうか。牛頭天王とは、牛頭栴檀せんたんを神格化したもので、その牛頭栴檀とは実は薬草なのである。したがって、疫病を治す効能があることから、薬草牛頭栴檀を神格化して牛頭天王として祀ったものと考えられる。この牛頭栴檀が薬草であることは、『翻訳名義集』衆香篇第34に、牛頭栴檀は薬であって、よく病を除くといっていたり、牛頭栴檀を塗れば、たちどころに傷も治る、ともいっている。

そして、この牛頭栴檀を材料にして、仏像を作ったとき福徳についても、「僧一阿含經」卷28に、釈尊が優填王うでんのうに説いた説話が載っている。そこに、牛頭栴檀で仏像を作った場合、その福徳ははかりしれないものがあることを教え

ている。

このようなことから、牛頭栴檀を材料にして作った神像が、牛頭天王像として祀られているとも考えられるのである。ともかく祇園社の祭神である牛頭天王は、治病薬牛頭栴檀を神格化したものであるし、しかも牛頭栴檀を材料とした神像である可能性もあり、その福徳は多大なものがあることが判る。

また、大晦日に「おけら火」として、祇園社いまの八坂神社から、火種を貰い、正月の煮炊きの火種としているのは、これも牛頭天王から授かった火種であって、その一年間の無病息災を願う意味があることを忘れてはなるまい。

祇園社の牛頭天王は、もともとはインドからやってきた神で、わが国にわたってきて、スサノオ命と習合した。^{のみこと}スサノオ命は、高天原を追われたため、怨みを抱く神とされ、御靈信仰にむすびつき、独自の展開をしている。スサノオ命の怨霊が、疫病を流行らせることから、その御靈を慰めるために、祇園御靈会が始まったとする。そして、このスサノオ命は、また『備後風土記』逸文によると、武塔天神のこととされる。武塔天神の話は、よく知られた話であるが、その話の中に、武塔天神が旅の途中、泊る宿に困っていたところ、貧しい蘇民将来が、宿を提供してくれた。武塔天神は、一泊の宿のお礼に、小さな茅の輪を与えた、家族のものにそれを腰につけるように勧めた。つまり、茅の輪をついているものは、疫病神が怖れて近づかない



八坂神社 本殿

からということで、蘇民将来の家族は流行病から逃れることができたという話である。この武塔天神が、祇園社に祀られているスサノオ命と同体とされている。このようにみてくると、祇園社の祭神牛頭天王は、またスサノオ命と習合し、疫病を防ぐ神であると共に御靈信仰の神としても崇められているのである。

実は、ここでは詳しく述べられないが、京都に独自といつていい神社に、御靈信仰によって建てられた神社が多い。これも京都市が政治の中心であったがために、権力争いに敗れて、不遇のうちに世を去った人達の怨霊を鎮めるための神社なのである。

ともかく、京都には数え切れない多くの文化財がある。そこには、大陸と日本の文化の融合の姿をみることができる。それをそのまま本来の姿で、後世に伝えてゆくことが、われわれに課せられた大きい義務であろう。

(妙法院門跡門主)

特集

京都の近代を飾った名建築家たち－3

京都で活躍したモダニズム建築家 笠原一人

はじめに

建築の歴史において、モダニズムの登場は極めて重要な意味を持っている。モダニズムとは、機能性や合理性を重視しながら、鉄やガラス、コンクリートを使った抽象的な形態によって建築を造り出すことを指す。1920年代から30年代にかけてヨーロッパで確立され、その後世界的に普及した。それは、従来の建築のあり方や人々の生活を根本的に変えてしまうものだった。

日本でもヨーロッパの動向に即応して、1920年代からモダニズムの動きが加速するが、日本の伝統文化を守ろうとする京都では、他の都市ほどにモダニズム建築は普及しなかったようなイメージがある。しかし数こそ多くはなかったが、当時の京都は、全国的に見ても早い時期からヨーロッパの影響を受けた最先端の表現や方法が追求され、独自の表現を持つモダニズム建築が造られた都市だった。

ここでは、1920年代から30年代にかけて京都で造られたモダニズム建築と、そこに至る試行錯誤の時代を生きた建築家たちを紹介しよう。

岩元禄

岩元禄（1893～1922）は、京都を拠点として活動していたわけではない。しかし、京都に新しい表現を最初に持ち込んだ建築家だと言える。岩元は東京帝国大学卒業後、1918年に通信

図1

京都中央電話局西陣分局
(現NTT西陣別館)
(一九二一年)



省技師となり、1921年には東京帝国大学助教授として迎えられている。が、その後結核を患い、1922年にわずか29歳の生涯を閉じている。したがって、岩元の建築活動は通信省の時代のわずかな期間に集中し、また3つの作品を残したのみである。

京都中央電話局西陣分局（現NTT西陣別館）（1921年）（図1）は、通信省時代に設計を担当した、岩元にとっての最初の実現作品であり、現存する唯一のものである。西陣分局の建物では、ファサードには48枚の女性の図柄のレリーフが半円形状に貼られ、その上に裸婦の彫像が配置されるなど、自由な感覚で構成されている。正面と側面の上部には、古典主義的な円柱が並べられているが、柱頭が省略されているため、モダンな印象を与える。幾何学性と装飾性が混在した、自由さと優美さを備えたものである。岩元は「ガイスト・スピーレン（知的遊戯）」が重要だと論じたが、西陣分局のデザインにはそれがよく表れていると言えるだろう。

1920年には、後述のように分離派建築会が設

立されているが、そのメンバーはまだ若く、作品を建築物として実現することができないでいた。そんな中で、岩元は彼らに先立って、そして彼ら以上に自由で繊細な建築を生み出したのである。

吉田鉄郎

岩元禄は1921年に逓信省を去ったが、当時の逓信省には、岩元の東京帝国大学の1年後輩であった吉田鉄郎（1894～1956）や2年後輩となる山田守、また山口文象らが在籍しており、岩元の後を受けて、先進的な表現を模索していた。中でも吉田は、京都の2つの電話局の設計を担当し、岩元に続いて京都で新しい時代の建築表現を示した。

京都中央電話局上京分局（現・カーニバル・タイムズ）（図2）は、交互に配された無装飾の柱型と縦長の窓が作り出すシャープで繊細な壁面と、日本瓦を載せた急勾配の屋根、弓形の屋根窓の組み合わせが特徴である。吉田は当時、表現主義的なデザインで知られたドイツの建築家、F.シューマッハーの影響を受けていたとされる。ここでは、特に屋根の形にその影響を読み取ることができる。

その後設計された京都中央電話局（現・新風



館）（1926年・31年）（図3）は、茶色いタイルで覆われた矩形の建物である。よりモダニズムの手法に近づいているが、アーチ状の窓や壁面のタイルの貼り方などに、細かな装飾性を認めることができる。吉田が傾倒したスウェーデンのR.エストベリの作品にも似た、北欧風の重厚かつ繊細なモダニズム建築である。

吉田はその後、1933年に東京中央郵便局、1939年には大阪中央郵便局を設計し、機能性や合理性に基づく日本におけるモダニズム建築の成熟を示したが、その端緒となる作品は、関西では京都で実現されていたのだった。

図3



森田慶一

吉田鉄郎の東京帝国大学での1年後輩にあたる森田慶一（1895～1983）は、1920年に設立された分離派建築会の設立メンバーである。当時の日本の建築界では、未だ折衷主義的な様式建築や、それに新しい技術で対抗しようとする「構造派」が大勢を占めていた。分離派建築会は、そうした大勢に異議を唱えるかのように、建築が「芸術」であることを主張した。

分離派建築会の活動は、1928年まで続けられたが、森田は1922年に京都帝国大学の教員となり、京都に拠点を移した。その後に造られ



（現・京都帝国大学農学部正門）
（一九二四年）



（現・京都帝国大学楽友会館）
（一九二五年）

た作品が現存している。その一つが京都帝国大学農学部正門（現・京都大学農学部正門）（1924年）（図4）である。これは、門と境界壁の上部に管理室の瓦屋根が延長されて載せられた奇妙なデザインのものである。アーチや柱型に用いられた先が尖ったデザインと合わせて、分離派建築会特有のデザインを体現している。

京都帝国大学楽友会館（現・京都大学楽友会館）（1925年）（図5）もまた、分離派建築会時代の森田の作品である。基本設計を武田五一が行い、森田が大きく改変して実現したのだとう。スペニッシュ様式を基調にしたそのデザインには、武田の趣味が反映されていると言えるが、玄関のポーチ部分は、Y字型の複数の柱に支えられた丸い屋根となっている。そこには、確実に分離派建築会の森田の造形を認めることができる。

森田は戦後、古典建築の建築論的研究に取り

組み、作風も古典主義風のものへと変化していく。戦前の2つの作品は、モダニズムに向けて揺れ動く、日本近代の建築家の試行錯誤を体現している。

本野精吾

岩元や森田、吉田らが、ヨーロッパの新しい建築の影響を受けながらも、いわゆる表現主義的なデザインにとどまっていたのに対して、次の潮流となるモダニズムをリードすることになる人物が京都に現れる。本野精吾（1882～1944）である。

本野は、東京帝国大学を卒業した後、当時京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）の教授であった武田五一の招きで、1908年に同校图案科の教授となる。その後1909年から11年までヨーロッパへ留学し、機能性や工業化を前提しながら工業製品から建築まで幅広いデザインに取り組むP.ベーレンスに新しさを見出している。

留学から帰国後の1915年、本野は西陣織物館（現・京都市考古資料館）（図6）を完成させている。今となっては、様式的で古風な建物に見えるが、無装飾で平板かつ幾何学性が強調されたファサードの壁面や飾り縁のない窓には、ベーレンスの影響を受けたモダニズムの手法を見出すことができる。



（現・西陣織物館）



図7・8 本野精吾邸



その本野が、モダニズムの思想と方法を独自に深化させたのが、1924年に建てられた自邸（図7、8）である。これは、建設の合理性と簡便性を重視して中村鎮式コンクリートブロックが用いられ、室内での人の動作が機能的になるようコンパクトに造られている。本野邸は、モダニズム建築の条件を備えた、日本でほとんど最初の建築作品だと言える。

その後、本野は上野伊三郎や伊藤正文らとともに、1927年に「日本インターナショナル建築会」を設立している。「建築会」は、W.グロピウスやG.Th.リートフェルト、タウトなど、ヨーロッパの前衛的な建築家も会員となり、国際的な活動を展開した。機能性や合理性に基づいた建築を重視しながらも、風土性をも重視するなど、独自の姿勢を見せた。

「建築会」の活動中の1929年に



図9・10 鶴巻邸（現・栗原邸）



竣工した鶴巻邸（現・栗原邸）（図9、10）は、自邸と同様、中村鎮式コンクリートブロック造で実現したものである。だが、住宅の規模も大きく、その形態も複雑である。自邸のように合理性や機能性が追求されたというよりは、コン

クリートブロック造の表現の可能性が追求された作品だと言えるだろう。

1930年に竣工した京都高等工芸学校本館（現・京都工芸織維大学3号館）（図11）もまた、本野の設計による。当初、グロピウスによるデッサウのバウハウス校舎のようなデザインで構想されたが、結局スクラッチタイル貼りの重厚な、そしてシンメトリーの構成による、やや古風な表現で実現している。だが、それこそがベーレンスを好んだ本野らしい表現だったと言えるかもしれない。

本野は、岩元や吉田、森田よりも10年以上年長である。しかし、本野の方が早期にモダニズムの理念と方法を獲得している。それは、本野が直接ヨーロッパに学んだことと、本野が物事を根本的なところから考えようとする、妥協しない性格であったことに拠っていると考えられる。



図11 京都高等工芸学校本館
(現・京都工芸織維大学3号館)

うえの い さぶろう 上野伊三郎

上野伊三郎（1893～1967）は、京都の宮大工の家に生まれ育った。大学卒業後1922年から1925年まで、ベルリンやウィーンに留学し、ウィーン工房を主宰したJ.ホフマンの建築事務所に所員として勤務したりしていた。そこでウイーン工房のデザイナーであったフェリス・リックス（上野リチ）と出会い結婚する。その後、二人は京都に居を構え、気鋭の建築家とデザイナーとして活躍することになった。1927年には、本野精吾らとともに「日本インターナショナル建築会」を設立し、上野は「代表」として活躍した。

上野は住宅を中心に建築の設計を手がけ、当時京都で多くの店舗を展開していたスター食堂やスターバーといった店舗の設計も手がけた。中でも1931年のスターバーは、1932年のニューヨークの近代美術館（MoMA）で開催された、いわゆる「インターナショナルスタイル展」に、ル・コルビュジエやグロピウスらの作品とともに出品され注目を浴びた。日本から選ばれたのは、山田守と上野の二人だけであった。

上野は、機能性や合理性を重視し無装飾な白い抽象的な形態を用いた、いわゆるモダニズム建築を実現していたが、室内にはリチ夫人によってデザインされた装飾的な壁紙が用いられるなど、モダニズムでは捉えきれない側面も有していた。それは、伝統工芸の街京都に育ち、ウィーンへ留学した上野にとっては、ごく自然なことだったのかもしれない。

残念ながら、現在京都には上野の作品はほとんど残っていない。島津邸（現・日本バプテスト

ト病院）（1929年）（図12）と柳本邸（1929年）（図13）が残っている程度である。いずれも増改築が激しく、ほとんど原形をとどめていないが、わずかながらも当時の最先端のモダニズムの表現を感じることができる。

図12



図13
アクト
写真
京都
美術
学校
所蔵
柳本邸

おわりに

1933年に「日本インターナショナル建築会」を頼って来日し、1936年に離日するまでの間、京都や仙台、高崎に滞在したB.タウトは、日本で最も優れた建築家は吉田鉄郎と上野伊三郎であると、「日記」に何度も書き付けている。いずれも京都に重要な作品を残した建築家である。こうしたタウトの認識は、日本のモダニズム建築の最前線が、当時京都に複数実現していたことを認識させてくれるだろう。

京都では、決して多くのモダニズム建築が実現したわけではなかったが、東京や大阪にも見られない独自の、そして先進的な作品が造られた。京都は、日本におけるモダニズム建築の実験の地であったと言えるかもしれない。

（京都工芸織維大学大学院助手）

平成17年度 助成事業

会員の皆様のご支援のもと、平成17年度におきましても助成申請がありました四大行事、文化観光資源、伝統行事・芸能の各保護事業69件に対し、以下のとおり総額6,435万円の助成をおこないました。

■四大行事（葵祭・祇園祭・大文字五山送り火・時代祭）の執行助成

対象件数 4件 助成金 3,948万円

■四大行事（祇園祭山鉾修理・大文字五山送り火火床等）の保存助成

対象件数 15件 助成金 750万円

「長刀鉾」四本柱新調等、「船鉾」鉾床板新調、「占出山」山傘建竹筒被布袋刺繡修理、「菊水鉾」後掛（皆川月華作）刺繡修理、「北觀音山」金幣新調、「木賊山」金幣修理、「霞天神山」金幣及び飾房新調等、「函谷鉾」真木・鉾屋根棟先獅子口修理、「南觀音山」天水引修理、「太子山」土蔵修理、「大文字」雜木刈込み等、「松ヶ崎妙法」「妙」総刈り等、「船形」総刈り等、「左大文字」火床・火床周辺修繕等、「鳥居形」通路階段整備

■文化観光資源保護事業助成

対象件数 10件 助成金 804万円

建造物の部

「久多自治振興会」観音堂（普門閣）天井修理工事、「実相院」表門及び書院屋根修理工事、「教王護国寺」旧湯屋南門修理工事、「隣華院」客殿付大玄関修理工事、「十輪寺」内仏殿（阿弥陀殿）床下修理工事、「恋塚寺」表門修理工事

美術工芸品の部

「泉妙院」紙本墨画（草花図）二曲一隻屏風修



理、「清涼寺」本堂來迎壁後障壁画修理

その他施設の部

「靈山顯彰会」靈山一帯及び各招魂社周辺整備、「京都古文化保存協会」松毛虫駆除事業

■伝統行事・芸能の保存執行に対する助成

対象件数 40件 助成金 933万円

行事の部

嵯峨御松明、賀茂競馬、藤森駄馬、糺の森流鏑馬、鞍馬山竹伐り会、花脊松上げ、広河原松上げ、雲ケ畠松上げ、鳥相撲、瑞饋祭、北白川高盛御供、日野裸踊、鞍馬火祭、松尾祭桂川舟渡御

芸能の部

蹴鞠、雅樂、念佛狂言（壬生・神泉苑・千本ゑんま堂・嵯峨）、六斎念佛（吉祥院・久世・中堂寺・梅津・小山郷・千本・嵯峨野・壬生・円覚寺・西方寺・桂）、やすらい花（川上・今宮・玄武・上賀茂）、久多花笠踊、八瀬赦免地踊、松ヶ崎題目踊、大原八朔踊、上棟祭

第36回「京の郷土芸能まつり」を開催

第36回を数えます京の郷土芸能まつりを、2月26日京都会館第1ホールにおいて約1,100名の観客をむかえ開催しました。今回は、「囃子」をテーマに京都市内の芸能から「矢代田楽」をはじめ4団体と京都府の芸能として相楽郡南山城村の「田山花踊」、小京都の芸能として岐阜

県郡上市の「岸剣神社大神樂」の特別出演による賑やかな舞台を楽しんでいただきました。



京の文化財探訪「靈鑑寺」春の一般公開事業を実施

去る4月1～9日、尼門跡寺院「靈鑑寺」春の特別公開を実施しました。京都市指定天然記念物「日光椿」など約30数種類の椿の咲く庭園を約5,800名の拝観者が見学されました。

理事会・評議員会報告

去る4月20日、第61回理事会評議員会を33名の役員の出席のもと開催しました。会議では、役員の一部異動、任期満了に伴う役員の改選、規則の改正、平成17年度事業報告並びに収支決算、平成18年度事業計画並びに収支予算が審議され、いずれも原案のとおり可決決定しました。

平成17年度文化観光資源保護協力者感謝状贈呈式・伝統行事・芸能功労者表彰式を実施

第61回理事会・評議員会終了後、京都市文化観光資源保護基金に多額のご寄付をいただきました7名の協力者と長年京都の伝統行事・芸能の保存と継承に尽力されてこられました17名の功労者に対し、それぞれ感謝状・表彰状並びに記念品を贈呈しました。受賞者は次の方々です。（順不同・敬称略）

◇文化観光資源保護協力者

岩佐氏昭・小西久子・浅野善三・西村達男・奥村和子・伊砂利彦・木村慎太郎

◇伝統行事・芸能功労者

尾崎美貴男（嵯峨お松明）、渡邊健蔵（鞍馬山竹伐り会）、西村剛一（花脊松上げ）、高橋富男（広河原松上げ）、麻田博司（松尾祭桂川舟渡御）、木村勝之（番匠儀式）、原田清（神泉苑念佛狂言）、堀切義郎（千本ゑんま堂大念佛狂言）、松田重行（嵯峨大念佛狂言）、梅原勝治（千本六斎念佛）、北村芳博（嵯峨野六斎念佛）、上嶽貞雄（西方寺六斎念佛）、岸本邦博（川上やすらい花）、藤井慎介（上賀茂やすらい花）、北谷龍次郎（久多花笠踊）、齋藤進（松ヶ崎題目踊）、大槻清昭（鉄仙流白川踊）



三大祭観覧・会員ご招待 —祇園祭・時代祭—

祇園祭の山鉾巡行（7月17日（月・祝））、時代祭行列（10月22日（日））の当財団観覧席にそれぞれ30名様をご招待します。ご希望の方は、当財団ホームページの会員専用サイト又は、はがきでお申込下さい。

申込資格 会員ご本人に限る（一名のみ）

申込締切日 6月16日（金）必着

申込方法 会員番号・氏名・郵便番号・住所・電話番号・いざれかの祭名を明記

してください。お申込は、法人個人
ともに一回のみ

●URL <http://www.kyobunka.or.jp>
会員専用サイト

●はがき宛先

〒606-8342 京都会館内
(財) 京都市文化観光資源保護財団事務局
三大祭観覧招待係 宛

※申込多数の場合は抽選とし、当選者の方
のみ、招待券を発送させていただきます
のでご了承下さい。発送は、祇園祭は
7月初旬、時代祭は10月上旬の予定です。

刊行物のご案内

京都市より京都市文化財ブックス第20集「京の城」(A4版、8頁、カラー)が発行されました。平安時代末から徳川幕府成立前後までに築かれた多種多様な城を取り上げ、発掘調査資料と写真等で分かりやすく紹介されています。

ご希望の方は、1,300円（送料別途340円）で
頒布していますので、事務局までお申込下さい。

インターネットホームページ
<http://www.kyobunka.or.jp>

当財団の活動や京都の文化財などの紹介、普
及啓発事業などを順次発信しています。今回、
新しく「京の史跡パンフレット」をダウンロー
ドしていただける様にしました。



又、会員専用サイトでは、
皆様からのお便りを掲載し
ています。京都の文化財や
財団の事業活動などへのご
意見やご感想・ご提案、会
員皆様方同士の情報交換
など気軽にお寄せ下さい。

京都の文化遺産を守り伝えるために —皆様の更なるご支援をお願いします—

平素は、保護基金にご協力をいただきあり
がとうございます。当財団は、皆様からお寄
せいただきます募金を基金として、京都の文
化観光資源の保護事業に対する助成や様々な
普及啓発事業をおこなっています。保護基金
に対し、会員の皆様からの追加募金や、お知
り合いの方々への呼びかけなど一層のご支援、
ご協力をいただけますようお願い致します。

※ご協力いただけます方には、活動を紹介していま
すパンフレットをご送付申し上げますので、事務
局までご連絡下さい。

お願い

寄付金にご協力いただきます際には、新しい納付書をご
使用下さい。なお、納付書が必要な方は、送付いたします
ので事務局までご連絡をお願いします。

編 集 後 記



□本号では、菅原信海妙法院門跡門主から、京都の文化
財について宗教の視点でとらえた貴重なご寄稿をいた
だきました。菅原ご門主は、文学博士でもあられ近著
の『日本人と神たち仏たち』(春秋社)をはじめ多くの
著書を執筆されておられます。又、特集の3回目として
笠原一人京都工芸織維大学大学院助手から近代に
普及したモダニズム建築に関して、京都で活躍した建
築家とその作品についてご紹介いただきました。

なかでも、文中にあります「旧京都中央電話局西陣
分局舎」が、このほど国の重要文化財に指定されるは
こびとなりました。

□本号より京都の文化財の特徴などをより一層わかりや
く理解していただくため、掲載写真などカラー刷り
にいたしました。今後も紙面の充実につとめていきた
いと思います。

会報 No.91

2006.5.15

会報題字／理事長 上山善紀

表紙／大文字五山送り火「鳥居形松明送り火」

表紙・掲載写真撮影／神崎順一（写真家）

編集・発行／財団法人京都市文化観光資源保護財団

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内

TEL：075(752)0235 FAX：075(752)0236